異文化と心通わせ ⑥1

村田　佳子

11月17日の講演では、田川地区高等学校PTA連合会のご父兄の皆さんにご支援いただきましてありがとうございました。この連載をご覧になってきてくださった皆さんにもお会いでき、私自身貴重な経験をさせていただきました。開催に当たり準備をしてくださった先生方、本当にありがとうございました。11月に帰省するのは珍しく、今年最後の秋晴れと初雪をいっぺんに見ることができました。そして東京へたつ前に、会いたかった人たちにも会えました。

子供のころから通っていた近所の文房具屋さんのおばちゃんもその一人です。小・中学校の通学路の途中にあるのでお店には昔から子供たちもよく立ち寄ります。友だち同士でガヤガヤと中に入り、なんとなく出て行けるという雰囲気ではなく「今日はこれを買いに来ました」と伝え、扱ってなければ「また来ます」と出て行く、そんなお店です。

おばちゃんは新商品のことはもちろん、インクのこと、ペンの書き味、ノートの紙質など商品のことはなんでも知っています。そして文房具を販売するだけでなく、子供たちの成長もずっと見てきました。たとえお客さんでもあいさつできない子供にははっきり注意します。そんなおばちゃんのことを子供のころは怖い人だと思っていました。

"先輩"は貴重な存在

でも大人になって分かったことがあります。おばちゃんはとてもユーモアがあって楽しい人だということです。帰省したときに立ち寄ると、おばちゃんは習っている三味線のことや最近の出来事を面白おかしく話してくれるので、あっという間に時間が過ぎるのです。仕事に誇りを持ち、お店に来る子供たちともちゃんと向き合い、思ったことは伝える、私もそういう「大人」になりたいとひそかにあこがれています。

そんな風に年配の方に直接学べるというのは、実は貴重なことだと思います。開発途上国には平均寿命が30歳代の国がいくつもあります。実際に来日するアフリカや東南アジア、中南米の方々によればずいぶん早くに祖父母や両親が他界していることが多いのです。私が80歳代、90歳代の祖母たちの話をすると驚き、「その時代に生まれた人たちは教育を受けたのか」「文字は読めるのか」「年を取ってから普段どうしているのか」など珍しがっていろいろ質問を受けることがあります。80歳を超えている人が田んぼに出ている風景というのは、日本ではよくみかけますが、これは世界的にいうと驚異的な事実なわけです。

日本の高齢化社会がもたらす問題はいろいろ話題になりますが、1世紀近く生きて激動の世の中を生で見てきた人がピンピンしている国というのは世界でも珍しいことです。そういう人たちから私たち若い世代、子供たちがアドバイスをもらわないのはもったいないことです。

私の周りには上手にアドバイスしてくれる先輩方がいます。「これは私の体験であって、あなたがどうするかはあなた自身の選択なんだけど参考までに…」。あるいは「私の時代や状況とはずいぶん違うと思うけれど…もしよかったら…」と黙って資料だけくれる人もいます。聞いた話を生かすかどうかは聞き手側の選択になるわけです。そのときはチンプンカンプンだったり、忠告があたっていてちょっとカチンときたり、落ち込んだりしますが、それでも後になって助かったということが少なくありません。これが子供なら何年後、あるいは何十年か先になって理解できるということもあるでしょう。何もアドバイスをもらえなくなるということほど悲しいことはありません。アドバイスをくれる人がいるというのは幸せなことです。

異なる世代の人は「異文化」を持った人で、時に宇宙人？のように感じることがあるかもしれません。でもその宇宙人？のように理解しがたい、異なるバックグラウンドを持つ人の経験や視点から学ぶべきことは多いと思います。気持ちを伝えること、それを受け取ることを恐れないでお互いが異文化を理解していけるといいのではないかなと思います。（鶴岡市出身、コーチングシステムズ）